

内に入ってゆくダンプカーの運転手たち。機動隊員もダンプの運転手たちもほとんど沖縄の人間だろう。その同じ県民の分断を目の当たりにして、怒りを通り越してくやしかった。

不当逮捕から再び現地リーダーに復帰した平和運動センターの山城さんの気迫あふれる指揮のもと、わたしたちは幾度ものゴボウ抜きにもめげず座り込みを繰り返した。そしてこれが海での船やカヌーでのたたかいとともに、辺野古で毎日繰り返されている日常であることに、沖縄の人々の不屈の思いを強く感じ感動した。

沖縄のたたかいは決して負けることはないであろう。わたしたちが支援に駆けつけたように、全国からそして世界から連帯の声が強まりつつある。わたしたちがいた時にもオランダの女性が、ブラジルや中国からの留学生が、座り込みや集会に参加し発言していた。ホワイトハウスに沖縄の声を届けようと大規模な署名を呼びかけたロバート・カジワラ氏も駆けつけてくれた。二十歳のとき親からの祝いの衣装を断って辺野古へ来たという岩手の女性が、再び参加していた。集団で来ていた福祉関係の労組の若い組合員たちの顔もあった。沖縄のたたかいは孤立してはいない。むしろ力強くじわじわと下から広がっているのだ。



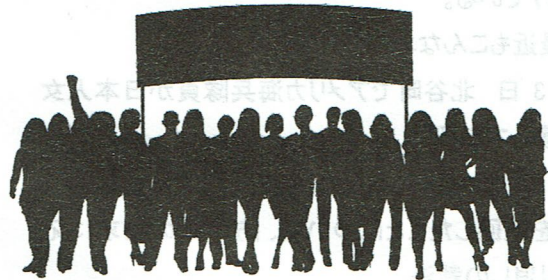
④本土での声をもっと大きく

島国日本の中でも辺境の地にある沖縄は、近い歴史の中でも中央為政者によって不当な処遇を受けてきた。“琉球処分”といわれるものに始まり、アジア太平洋戦争では本土防衛の捨て石とされ、唯一の地上戦を強いられて住民の4分の1の人命が失われるという悲惨を味あわされた。そして戦後も

本土と切り離され、米軍政のもとで人権を奪われた生活をしなければならなかった。1972年5月15日に「本土復帰」がなされ沖縄県ができた後も、日本政府のアメリカの核軍事戦略に従った政策によって米軍の横暴は許され続けている。現在もそうなのだ。

安倍政権は今、さらに深くアメリカとの軍事同盟関係を強化してきている。4月20日の日米の外相・防衛相が集まった安全保障協議委員会(2プラス2)においても辺野古新基地建設推進が確認され、対中国・ロシアを想定した宇宙・サイバー空間での軍事協力関係が強調されている。安倍首相は憲法9条の改定の意思を隠していない。

沖縄の悲惨を、中国・朝鮮・東アジアへの為政者による侵略を、これまで許してきたわたしたちのたたかひの弱さを、いまこそりこえなければならぬと思う。



沖縄・高江への愛知県警機動隊派遣 違法訴訟

すべての証人尋問が実現できるよう、裁判長宛の要請ハガキのお願い

2016年7月、沖縄・高江のヘリパッド建設で、愛知県警を含む全国6都府県から500名の機動隊を派遣し、反対する住民・支援者らを暴力的に排除し、建設を強行しました。この機動隊派遣は違法だと、愛知県を相手に裁判を起こしています。9回の口頭弁論で原告の主張はほぼ終わり、いよいよ証人尋問です。証人には、高江の住民、学者、ジャーナリストを予定しています。証人尋問が実現できるよう、裁判所宛の要請ハガキに取り組んでいます。同封のハガキを、ぜひ送ってください。